慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	飯田鼎著 イギリス労働運動の生成 （ 有斐閣 ）によせて
Sub Title	
Author	小川, 喜一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.11 (1958. 11) ,p.1014(78)- 1017(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19581101-0078
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581101-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

にあるのではなかろうか。

このような安易な方法は、独占価格と資本蓄積との関連を分析する視角が全くないという点にも現われている。著者は何ヵ所かで、本書は長期的傾向を問題にするのであって循環の問題はこの著作の範囲外であるとしている。しかし、長期傾向と資本蓄積の運動形態・産業循環とを全く切りはなすことは不可能である。したがって、長期的傾向が主題だとしても、それは常に産業循環との関連において把えねばならない。すなわち、物価騰貴は社会的再生産を攪乱し不均衡を一層激化する（p. 137）などという単純な形でではなく、独占価格が現段階の産業循環のあり方をどう規定し、又逆に産業循環の様相は独占価格にどう影響するか、という独占価格と産業循環の内的相互関連を明らかにしておく必要がある。インフレの問題も、産業循環との関連においてこそ、よりよく把えられるのではないかと思われる。又「最大限利潤の源泉論」も現段階における生産力の発展と生産関係との矛盾の発現形態・現段階の産業循環を明らかにするこころみの中で位置づけられてはじめて充分な意義を獲得するであろう。このような分析視角の欠如は、先にのべたように、著者がマルクス価格論の安易な要約にとどまり、その発展・拡充への課題意識をもっていなかったことと密接に結びついているといえよう。

以上 Kalweit の近著を紹介し、その独占価格論を中心に若干の問題点を指摘した。最後に一言したいのは、これらの諸問題が

Kalweit のみの問題ではないということである。それらは戦後――とくにスターリンの「最大限利潤の法則」の命題以後、マルクス経済学者の多くが、多かれ少なかれもっていた欠陥である。最近ようやくにして、こうした傾向に対する反省があらわれはじめてきている。本書をとりあげたのは、従来の傾向にぞくする Kalweit の著作を検討・批判することが、従来の欠陥を反省し克服するためにいささかなりとも役立つであろうと思われたからである。

（北原　勇）

飯田鼎著、『イギリス労働運動の生成』（有斐閣）によせて

一

「オートメイション」という言葉も、今日では、そのひびきの耳新しさを失いつつあるが、ともかく、第二次世界戦争を契機とする新たな技術革新の進展には、まことに目ざましいものがある。現代を指して、しばしば、「新産業革命」、あるいは「第二の産業革命」の時代と名ずけられる所以である。

ところで、「産業革命」という用語をこのように拡張して使用することの当否はともかくとして、現代の労働運動がかの古典的産業革命期におけるイギリス労働者階級の貴重な経験と教訓から学ぶべき多くの点を有することは、否定しえないところである。例えば、綿工業への新しい機械の導入がもたらした広汎な経済的、社会的諸影響は、今日、オートメイション化の問題と対決しつつある労働者階級にとってもまた、新たな視角から、改めて再検討を加えるに値するといってよいであろう。

しかし、「イギリス産業革命の実相はなおひとつの巨いなる謎であろうか」という五島茂教授の言葉のように、産業革命の社会史には、いまなお、神秘のヴェイルに包まれて、理論的研究による照明をかたく拒みつつある事件や人物が少なくない。また、この時期における労働者階級の窮乏化の問題をめぐって、ハモンド派とクラパム派との見解が対立し、いまだに一致を見るにいたらないことは、よく知られるとおりである。

もちろん、これらさまざまの問題点の解明のためには、今日も各国の多くの研究者によって真摯な努力がつづけられている。イギリスにおいても、最近の『ニュー・スティツマン』のブック・レヴュー欄は、相ついで、産業革命期の労働運動に関する研究を取り上げているが、D・リードの『ピータールー』(Peterloo)やA・R・ショイエンの『チャーティストの挑戦』(The Chartist Challenge)などが、それである。前者は、その題名のとおり、イギリス労働運動史上余りにも有名なかの一八一九年八月一六日の出来事を、その背景に力点をおきつつ、明らかにするため、尨大な資料を駆使した労作といわれ、また、後者は、J・ハーニーの生涯を中心として、チャーティズムに対して新たな解釈を与えようとするものである。

このように、イギリス産業革命期における労働運動の解明は、今日とくに重要性をもち、その研究のための努力が傾注されつつある折から、このたび、飯田氏の多年の研究成果である『イギリス労働運動の生成』が公刊されるにいたったことは、まことに喜びにたえない。

二

さて、右のリードやショイエンの研究が、ともに、特定の事件あるいは人物に焦点をおくものであるのに対して、飯田氏の著作は、フランス革命前後からチャーティスト運動の没落にいたるまでの、約五〇年間にわたる「黎明期の労働運動」を対象とし、その巨大な労働運動の流れに対して、歴史的分析を加えようとするものである。

まず、本書の第一の特徴と考えられるのは、F・エンゲルスをはじめとして、ウェッブ夫妻やG・D・H・コールらの古典的研究はもちろん、差しあたりわが国において入手可能な原資料も丹念に検討され、さらに、E・J・ホブスボームその他の最近の諸研究にいたるまでの、実におびただしい成果が基礎とされていることであり、この点にも、本書のために著者の払った並々ならぬ努力の程を

うかがい知ることができるであろう。ラダイッ運動について、かつての定説とは逆に、「運動そのものは、反動的な性格のものではなく、むしろ進歩的な色彩をもった労働運動であったといえよう」とする見解のごときも、そのほんの一例である。また、チャーティスト運動の解明は、この著作全体を通じて中心的位置を占めるものといってもよいが、チャーティズムをもって、「最初の広汎な真に大衆的な政治的に形をなしたプロレタリア的革命運動」とするN・レーニンの規定に対して、著者は一応の肯定を与えながらも、この運動の内包した極めて複雑な性格に注意しなければならないことを強調し、それを時期的、ならびに地域的に分析するとともに、さらに、指導者および支持階層の変遷ないしは差異を明らかにした部分は、まさに、本書中における圧巻というべきであり、その分析の基礎の広く、かつ、深いことを遺憾なく示している。

しかし、過去の成果の広汎な検索は、確固たる史観によって統一されねばならない。「現実のさしせまった要求にかられ、社会的な関心にかられて、過去の事実の探究に沈潜するとき、そこにはじめて歴史にたいする新しい態度も発見され、新しい認識も生れうる」という「序章」中の言葉のとおり、著者の最大の努力が注がれたのは、過去の諸成果に現代的視点から再検討を加え、それを再構成することにあったであろう。かかる視点の確立とともに、本書においては、三つの中心課題、すなわち、第一に「労働者階級はどのようにして発生し、彼らの団結はどのような経過をへて発展してきたか」を明らかにすること、第二に「その最も基本的な条件として、労働者階級の状態、とりわけ労働条件を正しく分析」すること、第三に、そして究局の課題として、「労働運動はどのような法則性のもとに発展するか」を解明することが、志向されている。

もとより、ここでは、それらの分析に詳しく立入って論ずる余裕を有しないし、また、著者は、右の第三の課題に対しても、決して公式主義的な解答を与えているわけではない。というのは、そのような解答は、もともと、著者の意図するところではなかったであろうからである。この種の歴史叙述がともすれば陥りがちな平板さから、本書が見事に脱却しえたのは、著者のもつ歴史への眼の適確さとともに、あくまで史的事実を追求してやまぬ強靱さと鋭利さとの賜である。その意味において、著者自らが断っているように、「本書は、いわゆる労働運動史の体裁をととのえてはいない。強いていえば、社会史とでもいうべき」であるとしても、けだし、それは当然であろう。

三

著者によれば、本書において展開された生成期におけるイギリス労働運動の分析は、実は、著者がかねてより念願とするイギリス社会民主主義の本質究明へと連なるものであり、この意味においては、「本書は、イギリス社会主義研究のための序説である」とされるが、この念願が、遠からず、本書に劣らぬ成果をもって達成されることを、心から期待せざるをえない。

ただ、この期待に添えて、著者に対して一つの註文を呈することが許されるなら、前述のように、チャーティズムの複雑な性格に対する著者の鋭い分析は高く評価されねばならないが、その社会主義的潮流について、今後さらに、一層の究明をお願いしたい。従来、チャーティスト運動に関する諸研究は、一八四八年のケニントン広場における挫折をもって一応終止符が打たれたと考え、それ以後の段階を軽視するものが多いが、しかし、実際には、この運動自体の内部において、社会主義的思想が最高頂に達するとともに、近代的な「社会民主主義国家の青写真」として注目される綱領が採択されるにいたったのも、まさに、五〇年代初期に外ならない。もとより、この点は、一九世期の前半までをその対象とする本書の範囲を逸脱するものとも考えられるが、しかし、この時期の解明によってのみ、チャーティズムのもつ「プロレタリア的革命運動」としての一面が一層明確にされ、また、八〇年代におけるイギリス社会主義復活への連続の環を適確に捉えることも可能となるであろう。そして、いまチャーティスト運動に対する研究の焦点の一つは、実は、このいわゆる「凋落過程」におかれているかに思われる。さきには、J・サヴィルによって『チャーティストとしてのアーネスト・ジョーンズ』(Ernest Jones: Chartist) が世に問われ、また、前記のショイエンの労作も、ハーニーの中に、それより半世紀後に輩出したイギリス型社会主義の指導者の先駆的な姿を見出すことを試みているが、いうまでもなく、これら二人の人物は、いずれもチャーティズムの最後の段階を代表する社会主義的指導者に外ならない。このように、現代イギリス社会主義の観点からの凋落過程におけるチャーティズムに対する省察と再検討とは、海外においても、着々進められつつあるように見受けられる。

ともあれ、本書に結晶された成果は極めて貴重なものであり、労働運動の研究に対する貢献はまことに大きいといわねばならない。最後に、著者に対して、この成果を基礎として、将来、さらにすぐれた研究を完成されるよう、お願いしてやまない。

（小川喜一＝筆者大阪市大助教授）